

公園と高級住宅地区—円山

札幌地理サークル会員 大久保 雅弘

円山という地名は、現在は条丁目表示のためほとんど残っていませんが、札幌市と合併する以前の旧円山町の範囲とすることが多いです。ほぼ西 20 丁目以西、北 5 条以南の、円山西町・界川町・双子山町・宮の森を含む範囲です。

札幌扇状地西端の円山を中心とした地域を見ますと、ほぼ碁盤目状の市域の西側には、山地の走向に沿ったいくつかの道路が見られます。南 1 条西 24 丁目から南東に折れて南 9 条へと続く道は、さらに伏見町へと山麓に沿っています。また、円山から三角山を結ぶ山麓線の北部には、国道 5 号線を基に、JR 函館本線、北 5 条手稲通、山の手通、北 1 条宮の沢通などが、ほぼ北西～南東方向に走っています。

これらの道筋のある地域は、札幌の初期における開拓地域であり、明治 3 (1870) 年、^{かのえうま}庚午三ノ村として成立し、後に円山村となる基本の道が南 1 条から南 14 条にかけて南東に延びる道路です(円山中央線)。さらに南東方向に延びる道は、明治 7 (1874) 年山鼻村が開村し、明治 9 年、山形県からの集団移住者でできた伏見の村落を結ぶ^{やまがはら}山根通(現西 25 丁目通)といわれた道です。また、札幌国道(5 号線)は、安政 4 (1857) 年銭函から豊平川を経て千歳への道を切り拓いた^{まほろば}札幌越新道が基になったもので、明治 8 (1875) 年、円山に近い琴似に北海道最初の屯田兵が入植して開拓を進めたところでした。

朝市のにぎわい

アイヌ人がコタンベツと呼んだ円山に、初めて入植したのは、明治 3 (1870) 年山形県庄内地方から移住した農民 30 戸 90 人でした。これは札幌本府建設にともなって、周辺地域に農村を配置し、食料の需給地を確保する目的で、島判官が農業移民を計画したことによります。この年が庚午(かのえうま)の年なので、「庚午一から三村」と命名しました。一ノ村が苗穂、二ノ村が丘珠、三ノ村が円山村になります。明治 4 年、当時琴似村などに寄留していた 9 戸が入植、さらに岩手県から募集移民 6 戸が入植し、明治 3 年から 4 年にかけて山形・岩手の両県から入植した 45 戸が円山の開祖となって開墾の鎌を打ち込みました。明治 4 (1871) 年に、庚午三ノ村から円山村と命名されたのは、札幌神社を造営する予定の宮地を、京都の円山にちなんで名づけたものです。

札幌と各地方を結ぶ道路のうち、銭函—札幌間は明治 2 (1869) 年に開削・改修を始めましたが、測量の食い違いや軟弱地盤などのために明治 6 年末に一応工事が完了するまで、

歩行すら困難な細い踏み分け道でした。工事の完成で、円山村の道路はこの一部として札幌への物資輸送幹線となり、後に野菜市場が円山につくられる誘因になりました。また、円山から南部の伏見を結び、石切山へつながる山根通も開かれるようになりました。

道路が次第に整って札幌との往来が便利になると、札幌神社の祭礼などには近村から多くの人が集まって賑わうようになりました。明治5(1872)年には、開拓使が、円山原始林から硬石を切り出し、本庁舎の礎石に用いたので山肌が削られてしまいました。このため円山の開拓功労者上田万平が山頂に山神碑を建て祀りました。

明治8(1875)年に村の有志が南5条西24丁目に掘っ立て小屋の簡易教育所を開きました。2年後に現在の北1条西25丁目に移転しましたが、これが円山小学校の前身で、学校維持や教育諸費用の負担を補うため、明治17(1884)年琴似西野二股周辺30万坪(83ha)の原野を無償でもらい受け、円山小学校の「学田」としました。明治43年(1910)年に学田小作人一同が、学田の開墾成立を記念し、上田万平の弟・善七の功績をも合わせて記念碑を建てています。

開拓初期の農作物は、そば・あわ・豆類が中心でしたが、明治中期頃からは亜麻・えん麦・ビート・果樹などの作物栽培も行われ、次第に多様化・商品化の傾向が見られます。また明治15(1882)年頃から円山の農民は、自家用に栽培していた野菜を籠に入れて背負い、札幌市中を売り歩いていたといわれます。明治20年代に入ると、野菜をまとめ買いして小売りする仲買人が増え、農民と仲買人が取引するようになりました。これが朝市へと発展しました。円山の朝市は自然発生的に形成されていきましたが、市場は、南1条西10丁目の取引所から市街地の拡大にともなって西15丁目、西20丁目へと移動し、大正6年(1917)まで南1条西24丁目が朝市の場所でした。円山の朝市が名実ともに知られた理由としては、伝統と野菜の種類が豊富だったことがあげられます。大正7(1918)年には円山^{きんぎょ}野菜組合が設立され、市場が組織化されました。その後、市電円山線やバス路線開通によって交通アクセスが向上したので、地域住民だけではなく多くの買い物客で賑わうようになりました。昭和28(1953)年には円山市場事業協同組合を結成し、大通西24丁目へ移転しました。

野菜産地から高級住宅地へ

円山の宅地化は、道路の整備と交通機関の発達によって促進されました。大正7(1918)年、札幌に電車が開通し、円山線は大正10(1921)年に南1条西15丁目～17丁目に初めて敷設され、大正12(1923)年には20丁目間と、琴似街道(西25丁目)間まで延長しました。

大正 15(1926)年には札幌温泉土地株式会社が定山溪温泉から引湯をして、界川に札幌温泉を開きました。また温泉客輸送のため、札幌温泉電気軌道を設立し、大通 23 丁目と札幌温泉を結ぶ路面電車を運行しました。しかし 2 年後に変電所の焼失と金融恐慌による経営難で倒産しました。

札幌市営バスは、昭和 8 年から大通—北 1 条—札幌国道—琴似本通—琴似駅間が運行し、昭和 9 年には国鉄バスが北 1 条—札幌国道を經由して運行され、円山への乗り入れが開始されました。また、昭和 8 年(1933)には札幌市の都市計画法による計画区域の用途別地域の決定で、円山は住宅地区として編入され、昭和 13 年には円山町となり、昭和 16(1941)年に札幌市と合併しました。

昭和 30 年代の中頃は、札幌の市街地が外縁に拡大を進める時期であり、昭和 40 年代の高度経済成長期にはマイホームの建設ブームが見られ、交通の便と自然環境に恵まれた円山地区が絶好の住宅地として注目され、高級住宅の建築が相次ぎました。南 6 条以南から伏見地区へかけて、北 5 条以北の土地区画整理も次々で行われて昭和 40 年代に完成し、円山の北麓の円山西町(旧滝の沢)から宮の森一帯にかけても宅地化が進行しました。野菜園は次々と消滅し、純農村として成立した円山村は、札幌市の住宅地へと変貌しました。

円山地域の戸数・人口の増加

年	戸数	人口
明治 3 (1870)年	30	90
13(1880)年	56	235
23(1890)年	121	440
34(1901)年	198	880
43(1910)年	213	893
大正 10(1921)年	340	1,856
昭和 10(1935)年	2,594	12,797
20(1945)年	3,695	17,847
30(1955)年	7,279	32,274
40(1965)年	12,730	46,842
50(1975)年	18,011	51,505
60(1985)年	24,277	57,860
平成 7 (1995)年	27,793	68,098
17(2005)年	34,002	66,945
25(2013)年	38,686	73,444

(資料:住民基本台帳より)

円山市場から裏参道へ

商店街も西 23 丁目通、南 1 条、北 1 条、南大通などの既存商店街のほかに、住宅地の拡大と交通の発達によって、西 24 丁目通、南 6 条、南 9 条、界川などの新興商店街が形成され、これらの商店街・商業者の増加にともなって、神宮通振興会・南円山商工振興会・円山商店街振興会・裏参道商店振興会が結成されて、地区商店街の発展に取り組んでいます。

昭和 40 年代になると、西 25 丁目通、南 6 条・北 1 条間の拡幅舗装が行われ、北 1 条以北の札幌国道や北 5 条通なども整備され、モータリゼーションに対応し、区画整理後の地域には住宅・商店が進出しました。高層建築のマンション・オフィスビルが立ち並び、商住混在の市街地へと急速に様相を変えました。昭和 47 年の冬季オリンピック開催を機に交

通網・交通体系の変化は大きく、市営バスは都心集中型から地下鉄駅短絡型の方向に改編されました。市電円山線は、地下鉄東西線着工決定により昭和 48 年に廃止となり、昭和 51(1976)年市営地下鉄東西線の白石～琴似間が開通し、円山地区内には円山公園駅・西 28 丁目駅が置かれ、地区内を運行するバスもこの 2 駅に接続されています。なお市営バスは、利用客の減少により慢性的な赤字経営が続いていたため、平成 15(2003)年に民営バス事業者へ委譲されました。

分譲マンションの増加と都心回帰

地下鉄東西線の開通は、都心部と円山地域とのパイプ役を果たしたと同時に、地下鉄を中心とした地域の都市的土地利用の高度化が急速に進み、円山公園駅・西28丁目駅の周辺には高層マンションが建築されました。1990年代前半、バブル景気により市内全域の地下鉄・JR線沿線で分譲マンションが競って建設されました。このバブルの崩壊後、札幌市内の分譲マンション建設に変化が起きました。経営破たんした金融機関などの社宅がマンション用地に転用されたのです。これらの社宅は、山鼻地区、円山地区に多く、敷地面積も広いので、中央区に再びマンションが建設されるきっかけになりました。これらのマンションが中央区の人口増加の受け皿となり、「人口の都心回帰」が進みました。

現在、中央区で高価格帯のマンションの多い地域は、札幌駅前、中島公園、近代美術館周辺、円山地域です。札幌駅前などは、都心に徒歩で通勤できる距離ですが、円山地域は、通勤に地下鉄とバスの乗り継ぎを必要とする場所が多く、交通アクセスが決して良いとはいえない地域です。この地域に高価格のマンションが多い理由として、地区内の公立小学校・中学校の存在があげられます。中央区で学級数の多い小学校は、緑丘小・円山小の順で、地域人口に占める児童が割合も高いのです。教育熱心な保護者が集まり、部屋数が多いマンションの需要があると考えられます。

平成 15(2003)年の都市計画法の改正で「都市計画提案制度」が生まれました。これは、土地所有者やNPO法人等が都市計画の決定や変更を市町村に提案できる制度です。この制度により、高層マンション建設に反対する住民運動が円山地区で相次いで起きました。平成 17(2005)年、「南円山 6 条地区」の住民活動により建築物の高さを制限するという地区計画が条例化されました。この地区計画の目標は「円山、蕨岩山が見える風景遺産を継承し、住民が地域への愛着を持ちながら住み続けることができるよう、現在の住環境の維持・保全を図ること」とされています。次いで「宮の森緑北地区」「南円山第二地区」でも高さ制限の地区計画が提案されました。

現在の裏参道

札幌神社への参詣道路だった北1条通りが表参道と呼ばれるのに対して、南1条通が裏参道です。バブル景気の時期が、裏参道の全盛期でした。西20丁目から西27丁目までの南1条通りがおしゃれな喫茶店、ブティックや工芸店などが並ぶ商店街に変身し、全国から観光客が押し寄せ「札幌の原宿」とも呼ばれました。しかし裏参道ブームは、そのバブル崩壊とともに急速に衰退してしまいました。最近の大きな変化としては、平成21(2009)年に大規模小売店舗マルヤマクラスが、札幌郵便貯金会館の跡地に開業したことがあげられます。本州大手スーパーとスポーツクラブを中核としており、地下鉄円山公園直結のアクセスの良さ、広い屋内駐車場など、既存の食品スーパーや地元商店街に大きな影響を与えました。現在「裏参道みちづくり計画」(平成21~27年度)によって、道路拡幅・電柱の地中埋設などバリアフリーに配慮した歩道や街路樹の整備が進められています。また「円山市場」はピーク時には50店舗を数えましたが、平成22(2010)年に大規模小売店舗の建設や経営者の高齢化により閉鎖され、跡地に本州資本の高層マンションが建設されました。現在は少数の店舗が「ミニまるいちば」として従来の隣接地で営業しています。



裏参道地区(南1条)の土地利用(■●▲6階以上 ■●▲5~3階)(平成25年5月現地調査)

■マンション ●店舗 ㊦大型小売店舗 ×コンビニ ▲会社・事務所 P駐車場

安らぎと緑の公園

先住アイヌの人達がモイワ(小さい山)と呼んだ緑豊かな円山は、高さ226mの小さなたずまいで、明治初期からの開拓と、都市化の変容を見つめてきました。円山は基底約1kmで、新第三紀に属する基盤の上にいるドーム型の古い安山岩からなり、原始林でおおわれています。北西から南東方向に尾根が続き、山頂は南東側に寄り、南東部はやや急な斜面で、山麓は界川・双子山町・北東や北西の山麓には円山公園が拡がり、円山の西部には大倉山ジャンプ競技場、円山の南西部に宮の森ジャンプ競技場があって、スキーのメッカです。大正4(1915)年には藻岩山(537m)とともに天然保存林に、大正10年には約390種に及ぶ原始林が天然記念物に指定されました。円山公園に隣接する国有地内の円山大師堂から山頂までの登山道が上田兄弟により開かれたのは大正3(1914)年で、この登山道に沿って

八十八観音像が安置されています。円山公園は明治13(1880)年に開拓史が杉・ヒノキ・ヒバ・松などの苗木を育成する養樹園としたところで、当時の自然林は今も北海道神宮内に保たれています。明治36(1903)年に公園予定地として当時の札幌区が公園造成を行いました。

平成25年度 円山公園内の主な施設		
名称	設営年	収容人数
陸上競技場	昭和9年	収容約12,000人
野球場	9年	50年改修 収容約25,000人
動物園	27年	入園者数74万8千人(平成24年度)
補助競技場	28年	シンダー走路(1周250m)
庭球場	34年	12面 収容約1,350人 夜間照明

(資料:市観光文化局スポーツ部企画事業課)

北海道神宮は、開拓の神として^{あまのたまがみ}天國魂神・^{おろのたまがみ}大那牟遲神・^{すくぬこながみ}少彦名神の三神を祀り、明治4(1871)年に円山の現在地を神社造営地と定め、札幌神社と称しました。昭和38年に北海道神宮に昇格しました。円山公園の奥地は滝の沢と呼ばれ、この地区が現在の円山西町です。公園の北西部の宮の森は、もと琴似十二軒と呼ばれ、明治4(1871)年以降移住した農家の戸数を地名としました。終戦後は住宅地に利用されて高級住宅地となっています。昭和18(1943)年に琴似が町制をしいた際に、平坦地の十二軒と山側の荒井山町とが宮の森と改められました。

旭山公園は円山の南に接する公園で、札幌市創建100年を記念して昭和46(1971)年に完成しました。もとは古野牧場・札幌温泉土地公社・北海道拓殖銀行などの所有地であったところで、札幌市のほぼ全域が望まれ、記念植樹地・公園施設もあって市民のいこいの場です。公園入口には陶土をトンネル掘りにして採取した跡や、中井陶器工場の窯跡があり、明治36(1903)年頃から大正末期まで「札幌焼」を製造したところです。

(引用文献)

沼田 武 1980. 公園と高級住宅地—円山. 札幌地理サークル編『北緯43度 札幌というまち・・・』203-210. 清水書院.

(引用ホームページ)

北翔大学・北海道大学共同研究グループ2013. 「創造都市さっぽろ」のシンボルエリア創出に向けた円山地区のブランド化のための調査・研究報告書. <http://www.city.sapporo.jp/machikiso/documents/kyodo-seika24-3.pdf>

札幌市役所2005. 「札幌圏都市計画南円山6条地区地区計画の決定」

http://city.sapporo.jp/keikaku/suho/taisan/jirui/sri/05minamimaruuyama/documents/mtnamimaruuyama_chikukeikan.pdf

〔最終閲覧日2014年2月15日〕